

平成 29 年 6 月 14 日現在

機関番号：32689

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2015～2016

課題番号：15K12861

研究課題名(和文)(没)個性の美学 E・M・フォースターとヴァージニア・ウルフを中心に

研究課題名(英文)The Aesthetics of (Im)personality: E. M. Forster and Virginia Woolf

研究代表者

岩崎 雅之(Iwasaki, Masayuki)

早稲田大学・文学大学院・その他(招聘研究員)

研究者番号:00706640

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文):本研究は、語り手が一人称で語るナラティブ(「介入する作者」)を繰り返し用いた E. M. Forster と、それとは対照的に、「意識の流れ」の手法に代表される、作者の存在を感じさせない実験的手法を用いた Virginia Woolf の作品に見られるイングリッシュネスの実態を明らかにするために、まずモダニズム期の教養小説において、彼らがいかにして若者と国家の離反を描いているかを分析し、その後、1930年代から彼らの野外劇がどのようにして「小さなイングランド」を提示するようになったのかを明らかにするものである。

研究成果の概要(英文):The study focused on E. M. Forster's "personal" narrative and Virginia Woolf's "impersonal" discourse in order to clarify their representations of "Englishness" in their Bildungsromans in the early twentieth century and their pageants in the 1930s and 1940s. I have been able to confirm the diversification of their representations of selfhood and the national identity of Britain, or "Little England."

研究分野:モダニズム

キーワード:E. M. フォースター ヴァージニア・ウルフ モダニズム イギリス小説 ヘリテージ映画 野外劇
イングリッシュネス

1. 研究開始当初の背景

21世紀に入り、イギリス・モダニズム期の教養小説および1930～1940年代の野外劇を通じ、イングリッシュネスの研究が行われるようになった。この流れを汲み、本研究はモダニズム期の教養小説において、いかにして若者と国家の離反が描かれるようになったのか、また、1930年代からどのようにして「小さなイングランド」が模索されるようになったのかを研究した。Jed Esty の *A Shrinking Island: Modernism and National Culture in England* (2004) と *Unseasonable Youth: Modernism, Colonialism, and the Fiction of Development* (2012) を出発点としている。まず *Unseasonable Youth* において、Esty はモダニズムの時代になると、教養小説が個人と社会の調和を描く側面を弱め、代わりに若者の帝国からの離反という、個人と国家の寓意物語を描くようになったと論じている。モダニズム期の教養小説の代表作として、Esty は Virginia Woolf の *The Voyage Out* (1915) や James Joyce の *A Portrait of the Artist as a Young Man* (1916) などを挙げている。

本書における教養小説研究は、*A Shrinking Island* の後期モダニズムのイングリッシュネス研究に接続することができる。*A Shrinking Island* において、Esty は1930年代から Woolf のようなモダニストたちが“little England”を求め、野外劇を製作するようになった過程を論じている。この議論の中で、1930～1940年代の野外劇の代表作として、E. M. Forster の“Abinger Pageant” (1934) や“England’s Pleasant Land” (1940)、Woolf の *Between the Acts* (1941)、T. S. Eliot の“The Rock” (1934) が挙げられている。

教養小説および野外劇に関する Esty の研究を敷衍し、それを批判的に検討するために、本研究は Forster と Woolf というモダニズムを代表する二人の作家に注目し、個人と国家の関係、また「小さなイングランド」に代表される新たな共同体が、どのようなナラティブによって、どのように表象されているのかを分析した。例えば Esty は *Unseasonable Youth* において、Charles Dickens から Iris Murdoch に至るまで幅広い作家の教養小説について論じ、また *A Shrinking Island* においては Forster、Woolf、Eliot の野外劇について詳細に研究している。しかし、Forster と Woolf の教養小説および野外劇の関係については徹底的に論じてはいない。彼らの作品を、通時的に論じることで、Esty の議論の有用性が明らかになるはずである。両作家は共にブルームズベリー・グループに所属する作家であり、彼らの作品は教養小説および野外劇の歴史の変遷を示すものであると理解することができる。その文学

的技法の特徴は personal と impersonal な語りという表現に要約できる。Forster はどちらかといえば伝統的なナラティブに依拠し、語り手が一人称で語る personal なナラティブを用いた。この語り手は「介入する作者 (intrusive author)」として理解することができ、*Howards End* (1910) や *A Passage to India* (1924) においては、リアリズム小説の枠組みを破壊する徹底的な過激さを示す。一方 Woolf は、「意識の流れ」の手法に代表されるような実験的かつ革新的技法を用いる。この技法を用いた代表例としては、*Mrs Dalloway* (1925) や *To the Lighthouse* (1927) などが挙げられる。彼女の作品は、作者による一人称の語りを排し、作者の影を感じさせない impersonal な語りの特徴としている。このように、Forster と Woolf は対照的な技法を用いているが、1930年代以降になると、共に野外劇の形式を用い、地方の共同体における「わたし」と「わたしたち」のあり方を問いかけた。彼らの作品からはどのような美学が読み取ることができるのだろうか、というのが本研究の背景にあった出発点である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、モダニズムを代表する作家である Forster と Woolf の personal および impersonal なナラティブに注目し、教養小説から野外劇に至るまで、彼らがどのように自己と国家の関係、言い換えれば「わたし」と「わたしたち」の関係を描いているのかを考察し、そこにどのようなイングリッシュネスの表象の変化を見ることができるのかを明らかにするものである。先行研究において、教養小説から野外劇に至るまでの Forster と Woolf の作品の包括的な分析は存在せず、そのため彼らの作品に見られるイングリッシュネスを論じる際には非連続性と断絶が存在していた。本研究は彼らの教養小説と野外劇の議論を接続することで、「わたし」と「わたしたち」の変遷を明らかにすることを目的とする。Forster と Woolf はしばしば伝統と革新という言葉で形容される対極的な技法を用いたが、最終的に「小さなイングランド」を主題とする野外劇を生み出したという点で一致している。対照的とまで言える道を歩んで来た両者が、なぜ最後に同様の形式・主題に行き着いたのか。そこにモダニズムの特徴を読み取ることができないか。本研究は、教養小説と野外劇によって表象されるイングリッシュネスの歴史の変遷に注目し、Forster と Woolf の作品において、どのようにして「わたし」と「わたしたち」が描かれているのかを分析した。彼らの作品の変化をたどることにより、教養小説の形式の限界が明らかになるとともに、野外劇がどのような小さなイングランドを求め

ていたのが明らかになる。

3. 研究の方法

本研究の目的を達成するために、以下の二つの方法を用いた。まず一つ目は、(1) Forster と Woolf の教養小説および個人と国家の寓意物語の形式を採用しているテクストの分析である。二つ目は、(2) 1930年代から 1940年代にかけて製作された彼らの野外劇の分析を行うものである。

(1) Forster と Woolf の教養小説と言われる作品 - - *Where Angels Fear to Tread* (1905)、*The Longest Journey* (1907)、*A Room with a View* (1908)、*Maurice* (1971)、*The Voyage Out* - - を、モダニズム期の教養小説との比較において分析した。また、より独創的な方法を用いて描かれた作品 - - *Howards End*、*A Passage to India*、*Mrs Dalloway*、*To the Lighthouse* - - においては、教養小説の形式から派生した、個人と国家の寓意物語がどのように描かれているのかを精査した。また、従来の作品分析に加え、雑誌における彼らの活動にも注目した。具体的には、イギリスの大英博物館および Senate House Library において、*Independent Review* や *Athenaeum* における彼らの評論記事などを収集し、歴史的な文脈においてそれらがどのような価値を持つものだったのかを調査した。書誌学的なアプローチを行うことで、彼らの美学の実証的な研究を行った。

(2) Forster の “Abinger Pageant”、 “England’s Pleasant Land”、および Woolf の *Between the Acts* を、エドワード朝時代に絶大な人気を博した Louis Napoleon Parker の野外劇などと比較することにより、第一次世界大戦を経、この形式に与えられた特殊性の変化を明らかにした。第一次世界大戦後から特に顕著になった大英帝国の衰退、およびヨーロッパ大陸におけるファシズムの脅威により、文学の分野ではそれまでとは異なるイングリッシュネスの生成が求められた。その際に Forster や Woolf のようなモダニストたちが利用したのは野外劇であった。野外劇は、地方の共同体に属する構成員が自ら主体的に製作に関わり、多くの場合その土地やイングランドの歴史について語るものであった。このような歴史的背景を議論に含めながら、Forster と Woolf の野外劇の持つ特殊性を論じることで、後期モダニズムの文学作品におけるイングリッシュネスが明らかになる。また彼らの作品を分析する際に、Eliot の “The Rock” も比較の対象とすることで、

幅広くモダニズム期の野外劇の特徴を分析した。

4. 研究成果

(1) 初年度に当たる 2015 年度においては、Forster と Woolf の作品の詳細な分析を行った。Forster の教養小説 - - *Where Angels Fear to Tread*、*The Longest Journey*、*A Room with a View*、*Maurice* - - は、従来の教養小説とは異なり、多くの場合同性愛者の成長を描いたものである(もしくは、仮に主人公が異性愛者であっても、同性愛的気質が内面の変化に大きな役割を果たす)ために、ホモエロティックな個人的人間関係の構築を通じ、社会的退行を成長とするようなプロットが存在していることが明らかになった。この点は、他のモダニズム期教養小説には見られない、Forster の教養小説の特殊性として理解することができ、また、モダニズム期の教養小説の理解に新たな観点を与える特徴である。

さらに、この形式から発展したと考えられる自己と国家の寓意物語としての *Howards End* と *A Passage to India* においては、Forster 作品の最大の特徴の一つと論じられる一人称の語りが登場する。この「介入する作者(語り手)」は、リアリズム小説の枠組みを破壊するメタナラティブを生み出す。フォースターの personal な語りは、Henry Fielding の *Tom Jones* (1749) や William Makepeace Thackeray の *Vanity Fair* (1848)、George Eliot の *Adam Bede* (1859) に見られるような語りとは異なり、小説の生み出す幻影そのものを霧消させるようなポストモダニズム的特徴を持つものである。この介入する作者の「わたし」の語りにより、*Howards End* においては「誰がイギリスを継承するのか」という「わたしたち」の問題が提示され、また *A Passage to India* においては、フォースターが理想としていたホモエロティックな個人的人間関係が不可能なものとされ、「それでは何をすべきか」という問いを「わたしたち」に投げかけている。

また、Woolf の没個性のナラティブが具体的にどのような特徴を備え、そこにどのような「わたし」と「わたしたち」の姿を見ることができているのかを明らかにするために、盛期モダニズムの時期に発表された *To the Lighthouse* (1927) を分析した。その際に、芸術家 Lily Briscoe が獲得するヴィジョンに注目し、科学的・帝国主義的言説がどのように美学的なそれと結び付いているのかを明らかにした。Lily は芸術家としての目を持つ人物であり、Mrs Ramsay との

交流を通じ成長していく。彼女の成長のあり方は教養小説で描かれるものとは異なるが、父権主義において抑圧される女性の内面的成長を描いたものである。彼女の知覚は科学技術によって拡張され、その身体は機械論的に認識されている。それを通じて獲得された経験が、最終的に帝国主義的言説と微妙な関係を有するポスト印象派的ヴィジョンの中に収斂していく。彼女の作品の完成は、同時に新たな人間関係の構築を達成するものとして提示されている。Mrs Ramsay とは異なる女性としての生き方を Lily は模索し、それにより新たな「わたし」の姿を提示する。この研究成果は、「『灯台へ』におけるヴィジョンのあり方-科学的、幾何学的そしてコロニアルな目」として『ヴァージニア・ウルフ研究』に掲載された。

- (2) 最終年に当たる 2016 年度においては、まず 1930 年代から Woolf と Forster が関心を寄せていた野外劇を通じ、変容していくイングリッシュネスとの関係で、「わたし」と「わたしたち」がどのように表象されているかを分析した。具体的にはまず、Woolf の *Between the Acts* における野外劇の形式の使用と、登場人物が動物に変化していく「生成変化」の結び付きを考察した。この作品において、Woolf が人間と非人間的なものの差異を超えた、新たな共同体の創出を目指していたことを明らかにした。例えば登場人物の Isa は夫の Giles に対して憎しみを抱き、男性中心主義によって成り立つ社会に対し敵意を抱いている。彼女は豪農の Hanes に対し、密かに恋心を抱き、心の中で白鳥になる。白鳥に生成変化することで、彼女は妻や母というアイデンティティを脱ぎ捨て、新たな「わたし」になる。また同様に、同性愛者である Dodge も自信を分裂した心を持つ蛇と考えているが、自分たちには別の生があり、他者と事物のうちに生きるのだという Mrs Manresa の言葉によって、自身の生成変化が肯定されるような印象を受ける。また、作中に登場する野外劇の終幕では、舞台上に動物が上がり込み、もはや人間と動物を隔てる壁がないことが伝えられ、この出来事を契機に、新たな共同体の姿が模索されるようになる。この研究成果は、国際学会 The 3rd Korea-Japan Virginia Woolf Conference 2016 において “What Lies between the Acts? – Woolf, Deleuze and Pageant” と題して発表を行った。様々なフィードバックをもらうことができ、論文にまとめ、『ヴァージニア・ウルフ研究』に「『幕間』における「わたしたち」の<共>性」として掲

載された。

さらにモダニズム作品に関するイングリッシュネスを詳しく論じるために、1980 年代から盛んに製作されることになった Heritage film における「わたしたち」の表象を分析した。Forster の小説 *A Passage to India* は、David Lean の手によって、1984 年に、現代のイギリス人が受け継ぐべき「遺産」としてのヘリテージ映画に翻案された。ヘリテージ映画とは、英文学の古典などを題材とし、イギリスの過去を美しく映像化した映画のことを指す。登場人物は多くの場合上流階級、もしくは上流中産階級に属する人々で、イングランド南部の自然が理想化される。原作に忠実であるかどうかということはあまり重視されず、代わりに過去を、純粹かつ汚れない完全無欠な一つのイメージとして提示することが目的とされる。Forster の作品では、他にも例えば Merchant-Ivory によって *A Room with a View* や *Howards End* がヘリテージ映画に翻案されている。これらの作品は不安定な 1980 年代イギリスの状況を反映しており、強気大英帝国の時代のイギリスを理想化する傾向がある。

映画 *A Passage to India* が原作と大きく異なる点としては、Aziz と Fielding の男性同士の同性愛的な関係ではなく、女性の Adela Quested が主人公としての扱いを受けている点である。結果として Forster の personal なナラティブが、Lean によって現代の「わたしたち」のためのイメージへと変換されたことが明らかになった。この研究成果は、日本ヴァージニア・ウルフ協会において、「『インドへの道』とヘリテージ映画におけるイングリッシュネス」と題して発表した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

岩崎雅之「『幕間』における「わたしたち」の<共>性」、『ヴァージニア・ウルフ研究』第 33 号、2016 年、pp. 16~31

岩崎雅之「『灯台へ』におけるヴィジョンのあり方-科学的、幾何学的そしてコロニアルな目」、『ヴァージニア・ウルフ研究』第 32 号、2015 年、pp.1~16

〔学会発表〕(計 2 件)

岩崎雅之「『インドへの道』とヘリテージ映画におけるイングリッシュネス」第 36 回日本ヴァージニア・ウルフ協会全国大会、京都女子大学、2016 年

Masayuki Iwasaki “What Lies between the

Acts? – Woolf, Deleuze and Pageant,” The 3rd
Korea-Japan Virginia Woolf Conference 2016,
Kookmin University, 2016

〔図書〕(計 0件)

6.研究組織

(1)研究代表者

岩崎 雅之 (IWASAKI, Masayuki)

早稲田大学・文学学院・招聘研究員

研究者番号：00706640

(2)研究分担者 該当なし

(3)連携研究者 該当なし